

ディムズデイルの変貌

元田, 脩一

<https://doi.org/10.15017/2332749>

出版情報 : 文學研究. 71, pp.89-103, 1974-03-25. 九州大学文学部
バージョン :
権利関係 :

デームズデイルの変貌

元 田 脩 一

1

J・E・ベッカーにいわすれば、デームズデイルは「動物的活力」(animal vitality)⁽¹⁾の持ち主で、その活力が彼にヘスターとの罪を犯させたのであり、森の場面はその活力の再現にはかならず、「精神的に彼は変貌しはしない」⁽²⁾し、「デームズデイルは終始ピューリタンの廉潔さの——虚偽と道德的曖昧さ——を代表する人物」⁽³⁾で、「死ぬときまでも、依然としてピューリタニズムの核心に宿る曖昧さの象徴にとどまる」⁽⁴⁾ということになり、デームズデイルの精神的変貌は否定される。だが、『緋文字』というこの作品に、その重要なテーマの一つとしてデームズデイルの精神的変貌が描き出されていることは否定しがたい事実であって、ベッカーはその事実を無視しているのである。そして、ベッカーをしてその事実を無視させたものは、物語が森の場面から、書斎の場面を経て、知事選挙祝賀日の場面に移っていくさいの、デームズデイルの精神的変貌の複雑さであり、最後の晒し台の場面における彼の告白の動機の曖昧さであるといえるだろう。

デームズデイルがベッカーのいうところの「動物的活力」によってヘスターと犯した罪を、ホーソンは「情熱

の罪」(sin of passion)と呼んでいるが、その罪を犯した時点におけるディムズデイルの精神的状態ないし段階を以後の彼の精神的変遷の原点とすれば、彼はその後三つの段階において変貌を遂げたことができる。そして、その第一の変貌は「炎の舌」(Tongue of Flame)をかちえたときの彼の姿に見られるのである。

「情熱の罪」の報いとしてヘスターが嬰兒を抱いて晒し台に立たされて以来、ディムズデイルは「恐怖と良心の呵責と苦悩と空しい悔悟」に間断なくさいなまれるが、そのために「彼の知的天分と、道徳的知覚力と、感動を経験しそれを伝達する力」は「異常な活動状態におかれ、」彼の説教は会衆のこころの琴線を鳴り響かせずにはおかないものとなるのだ。

まさしくこの重荷そのものが、人類の罪深い同胞に対する親密な共感を彼に起させ、そのために彼のこころは、彼らのこころと調和して震え、彼らの苦痛を彼のこころに受け入れ、彼自身のこころの苦痛の鼓動を、悲しい説得力のある進るような雄弁で、数多くの人々のこころに送り込んだのだ。……人々はこのように彼らを感じさせる力がなんであるかわからなかった。彼らはその若い牧師を神聖なるものの奇蹟と見做した。その牧師を、天の伝える英知と叱責と愛の代弁者と想像したのだ。

このディムズデイルの説教の特質を、ホーソンは『使徒行伝』の故事から言葉を借りて「炎の舌」と呼び、それを「こころの固有の言葉で全人類の同胞に語りかける力」と述べているが、ディムズデイルが自責と悔悟と苦行によってこの「炎の舌」を獲得したことは、明らかに原点における彼と一線を画したことであり、これを彼の第一の変貌と呼ぶことができよう。次にディムズデイルの第二の変貌は、彼がヘスターとの逃亡を決意したときに惹起されたということができる。

秘密の罪を抱いた虚偽の生活と、罪亡ぼしのための断食、徹夜、自虐の鞭打ちによって憔悴したディムズデイルは、森で彼を待ちうけたヘスターに、チリングワースが彼女の夫であることを打ち明けられると、絶望のあまり地面に倒れ、ヘスターに救いを求める。そして、ヘスターの説得を受け入れて彼女母娘との逃亡を決意し、より洗練された文明社会で自分の天分と知識を活用することを計画するのであるが、その未来の夢に胸を躍らせて森から帰るディムズデイルのころには異常な衝動が湧き上がってくるのだ。

実際、その内部の王国における王朝と道徳律の全面的変化ということ以外には、そのとまどった不幸な牧師に今伝わってくる衝動を適切に説明しうるものは何もなかった。一步あるくごとに彼は、何か異常で狂暴で邪悪なことをするようにそのかされたが、それは無意識的であると同時に意図的であり、彼自身を無視して、その衝動に反対する自我よりもっと深い自我から生み出されたという感じであった。

この衝動に駆り立てられたディムズデイルは、森からの帰路、彼の教会の執事と、彼の教会員のなかで最年長者の敬虔な婦人と、彼の崇拜者のなかで最も可憐な処女と、遊び戯れる子供たちと、酔漢の船乗りに出会うが、そのいずれに対しても破廉恥極まる言葉を思わず口にかかかってやっと自制し、通りかかった魔女のヒピンズ女史からは森での悪魔との再会を指喚されて、彼自身もまた魂を悪魔に売り渡してしまったのではないかと自問する。そしてそのことを、ホーソンは次のように説明している。

不運な牧師よ！ 彼はそれと極めて似かよった取引きをしてしまったのだ。幸福の夢にそのかされて——これまでそのよ

うなことは一度もしなかったのに——地獄に落ちる罪というを知っているながら、わざわざ選んで、その罪に身を任せてしまったのだ。そしてその罪の伝染性の毒が、彼の道徳組織全体に急速に広まってしまったのだ。それがすべての聖なる衝動を麻痺させ、ありとあらゆる悪の衝動を生々と目覚めさせたのだ。軽蔑、嫌味、いわれのない悪意、理由もなく悪を願う気持ち、一切の善なるもの聖なるものに対する嘲笑、それらのすべてのものが目覚め、彼をおびえさせながらも誘惑するのだ。そして彼とヒビンス女史との出会いが、もし実際に起ったことであるならば、それは彼が邪悪な連中や、邪道に踏み込んだ霊たちの世界に、共鳴と友情を示したことにほかならなかったのだ。

このようにしてディムズデイルは、辛うじて悪の衝動を抑え、自分の書齋に逃げ込むのであるが、その書齋の場面は引用に価する。

その机の上には、インクで汚れたペンの側に、まだ書き終えていない説教がおかれていた。それは二日前に思想がページの上に湧き出てこなくなったために、文の途中で打ち切られたままになっていた。あのようなことを（断食や徹夜の苦行を指す）行ない耐えぬきながら、その箇所まで選挙祝賀の説教を書き進めてきたのが彼自身であり、瘦せこけて頬の青白い牧師であることを彼は知っていた！しかし今の彼には、自分が一步離れて、以前の自己をあざけり憐れむような、が半ば羨望の混じった好奇心で眺めているように思われた。あの自己は失われてしまったのだ！別の人物が森から帰ってきたのだ！以前の単純さでは決して達しえないところの隠された秘密についての知識を身につけたより聰明な人物が帰ってきたのだ！が、それは、なんと痛ましい知識であったことか！

牧師は一人になると家の召使いを呼び、食事を求め、それが運ばれてくると、むさぼるような食欲で食べた。それから、選挙祝賀の説教の既にかかれたページを火のなかに投げ入れると、すぐさま新しく書き始めた。それを書きかけると思想と感情が衝動的に流れ出てきたので、彼は自分が神の啓示に導かれていると思ったほどで、天が彼のような汚れた音管を通して、そ

の壮大嚴肅な神託の音楽を伝えることを適切と見做したことを、彼はただ不思議に思うばかりであった。

森でヘスターからチリングワースのことを打ち明けられたとき、ディムズデイルは、今まで通り罪を隠して虚偽の生活を続け、良心の呵責とチリングワースの陰謀のために心身ともに衰弱させて自滅するか、あるいはヘスターとパールを伴って逃亡するか、それとも公衆の前で罪を告白して真の懺悔滅罪を行なうか——そのいずれかをとるほかはなかったし、あとの二つのいずれを選ぶにしても精神的変貌を遂げねばならなかったわけであるが、そのとき彼は「彼女（ヘスター）の同伴なしにはもはや生きていくことはできない」と確信し、ヘスターがいうところの「あなたが最もみじめであった世界から、今でも幸福になれる世界へ」脱出を決意することによって、第二の変貌を遂げたのである。だが、この第二の変貌は、ベッカーがいうような単なる「動物的活力」の再現——「情熱の罪」の再体験——ではないし、決して原点への復帰を意味してはいない。なぜなら、既にディムズデイルは第一の変貌を遂げることによって「天の伝える英知と叱責と愛の代弁者」として崇拜され、ピューリタンの神権社会のエリートとしての地位を確立しており、彼が逃亡を決意したことは、その地位を放棄することを意味するだけではなしに、それは「——これまでそのようなことは一度もしなかったのに——地獄に落ちる罪」ということを知っていながら、わざわざ選んで、その罪に身を任せてしまった」ことであり、そのために彼の「内部の王国における王朝と道徳律の全面的変化」が惹起され、彼は「ありとあらゆる悪の衝動を生々と目覚めさせ」られて、「以前の単純さでは決して達しえないところの隠された秘密についての知識を身につけたより聡明な人物」として生まれかわったからである。これらのことは、「情熱の罪」を犯した時点においてのディムズ

デイルが経験しえなかったことであり、この第二の変貌は、第一の変貌によって彼が到達した位置からの逸脱という意味では原点と同じ路線上に並んではいるが、原点よりもより高い次元において遂成された変貌といわねばならない。ベッカーは原点とこの第二の変貌においての段階の差、次元の相違を看過しているのである。

ともあれ、今や第二の変貌を遂げて新しく選挙祝賀の説教を書き始めたディムズデイルは、崇高清廉な使徒と目されていたかつての憂愁の牧師ではなしに、人間性に関する「痛ましい知識」を体得して、その「汚れた音管を通し」「神託の音楽」が伝えられるのを感じする真理の伝達者であり、その原稿には偏狭固陋なピューリタンの道徳立法に対する批判が述べられ、人間性の尊重と、善悪二重の人間の宿命的な実体の容認が力強く説かれていと想像しても、決して不自然ではないだろう。

だが、それから三日目に壮麗な行列とともに祝賀説教に臨むディムズデイルの姿は、ヘスターをして「これがあの人だったのだろうか？」と疑わせ、「自分たちの共通の世界からかくも完全に身を引くことのできる」その牧師を、「ほとんど許しがたい」と感じさせたほどの豹変ふりで、その祝賀説教では、人間性に関する「痛ましい知識」は一言半句も述べられず、ピューリタンの道徳立法に対する批判どころか、相変らずの「炎の舌」によって「神と人類社会の関係」が説かれ、ニュー・イングランドの栄光ある未来が予言されたにすぎないのだ。これは明らかに、第三の変貌を遂げたディムズデイルの姿であるが、その変貌の本質は、彼が祝賀説教を終えて、晒し台に登ったときの彼の言動によって明らかとなる。

ヘスターにささえられながら晒し台に立ったディムズデイルは、「ぼくらが森で夢見たことよりも、この方がよいだろう？」とヘスターに囁き、さらに次のようにいう。

君とパールのことは神の定めたままにしよう。神は慈悲深いのだ！ 神がわたしの目のまえにはつきりとお示しになったご意志を、今わたしに行なわせてくれ。ヘスター、わたしは死にかけている身だ。だから、急いでわたしに自分の恥辱を受けさせてくれ。

そして、彼が人々の凝視のうちに、自分の胸の垂れ襟を破りとると、そこには彼の「罪と恥辱の烙印」があらわれ、彼はその「神の判決」を人々に示したまま崩れ落ち、「わたしたちは不死の生活を一緒に送れないのですよか？ わたしたちは確かに間違いない、この悲嘆のすべてをもってお互いに罪の贖いをしたのですから」というヘスターの言葉に、彼は次のように答えて息絶えるのである。

わたしたちが破った掟！ ここにこのように恐ろしくもあらわれた罪！ これらのことだけを念頭において欲しい！ わたしはこわいのだ！ 恐ろしい！ 多分わたしたちが神を忘れたとき——お互に相手の魂に対する敬愛を侵したとき——そのときから、わたしたちが再び会って永劫純粹の結合を遂げるといふ希望は空しくなったのだ。神はご存知なのだ。神は慈悲深いのだ！ 神はその慈悲を、何よりもまず、わたしを苦しめ悩ますことによってお示しになったのだ。わたしの胸にこの燃えるような呵責を与え、その呵責を絶えず灼熱させておくためにあの陰険で恐ろしい老人を送り込むことによって！ また、人々のまえで恥辱に晒されながらも勝利の死を遂げさせることによって、神はその慈悲を示されたのだ！ これらの苦悩のどの一つを欠いても、わたしは永遠に失われていただろう。

森ではヘスターを「わたしの素晴らしい天使」と呼び、「わたしは——病いに疲れ、罪に汚れ、悲しみに染った自分自身を——あの森の木の葉の上に投げ捨ててすっかり生まれかわり、慈悲深い神を賛美するための新しい

力を身につけて立ち上がったような気がする」といい、ヘスター親子との新生活の希望を与えられたことを神の慈悲として賛美したディムズデルが、ここでは彼の受けた呵責苦悩を神の慈悲と考え、その神の裁決にヘスター親子の運命を委ねてしまい、森では逃亡に同行することをヘスターに哀願した彼が、ここでは彼らの犯した掟と罪の重大さを説いて彼らの結合は来世においても不可能であろうと予言し、森では「地獄に落ちる罪」を「わざわざ選ん」だはずの彼が、ここでは峻厳なる神への絶対的帰一を示していて、もはや今の彼にとっては、森での出来事は単なる悪夢にすぎないのだ。ペッカーが「ディムズデルは終始ピューリタンの廉潔さの——虚偽と道徳的曖昧さ——を代表する人物」といったのは、ディムズデルのこの豹変ぶりを指したのであろう。だが、その豹変ぶりは彼が第二の変貌の段階から一転して第三の変貌を遂げたことを明示しており、しかも、この段階における彼は、神の掟の厳しさを実感し、顕現する罪に戦慄し、苛酷な懲罪ともいうべき呵責苦悩を「慈悲」と呼び、一切の誘惑を斥け、怯懦心に打ちかち、神の意志にひたすら恭順して、第一の変貌を遂げたときの彼よりも一層熾烈なピューリタニズムの信奉者となっているのである。したがって、この第三の変貌は、第一の変貌の段階への逆転ではない。ちょうど、第二の変貌が原点と同一路線上により次元の高い段階で達成されたように、この第三の変貌は第一の変貌と同じ路線の上により高次の段階において達成されたのである。このように、ディムズデルの精神的変貌はジグザグに揺れながらも鮮明な経路を示しているのであるが、第二の変貌と第三の変貌はいかなる必然的関連性をもっているのか、いいかえれば、最後の場面におけるディムズデルの告白の動機は何なのか、ということに関しては曖昧模糊として理解に苦しむのである。いや、その関連性・動機は殆ど書かれていないというのが実情であって、われわれはそれを推測するほかはないのである。が無論、その明白な関連

性・動機が欠如しているからといって、ディムズデイルの精神的変貌を無視してしまつてよいということにはならない。以下、若干の推測を試みてみよう。

2

第二の変貌を遂げて書齋に帰ってきたディムズデイルは、ヘブライ語の聖書と未完の原稿をまゑにして、既に引用した通り、かつての自分についての回想に耽るが、R・メールはこの場面でディムズデイルが、森で得た新しいヴィジョンと、それ以前に彼が修得していた信仰と英知を統合したと考えているし、J・スタブズは、そのとき書齋に入ってきたチリングワースをディムズデイルが、「片手をヘブライ語の聖書にのせ、もう一方の手を自分の胸において」迎えた姿を捉え、片手のおかれた聖書は「峻厳な正義」を、もう一方の手のあてられた胸は「抑制されない情動」をあらわすとし、ディムズデイルはその二つのものを止揚したのだと想定している。そして、メールもスタブズもともに、それらの矛盾した二つの要素の止揚統合の結果が、選挙祝賀日におけるディムズデイルの言動にほかならないとするのだ。すなわち、メールとスタブズは、この書齋の場面でディムズデイルの第三の変貌が遂げられたと見做すのである。だが、祝賀日におけるディムズデイルの行動は、二つの矛盾した要素の止揚統合から生まれたものとは決していいがたく、一方が他を完全に排除したところに成り立っているといわねばならないのだ。そこでは、彼が森からの帰路認知したところの自己の奥底に潜む悪は、跡形もなく抑圧され、森で彼が抱いた人間の可能性と自由と改革への希望は、悪夢として一掃されつくして、その彼の言動には彼が森で得たヴィジョンの片鱗さえもうかがうことのできないのである。

また、ディムズデイルが書齋に帰って回想に耽っているあいだは、まだ第二の変貌の段階であって、第三の変貌は行なわれていないということは、森からの帰路の彼の状態を描いた次の文と、書齋での回想の箇所を比べて見れば明らかであろう。

牧師自身の意志と、ヘスターの意志と、二人のあいだに生じた運命が、この変貌を惹起させていたのだ。町はこれまでと同じであったが、同じ牧師は森から帰ってこなかったのだ。彼に挨拶する友人たちに彼は次のようにいってもよかったかもしれない——「わたしはあなた方の考えているような人間ではない！ わたしはその人物を、向こうの森の、ひっそりした谷間の奥の、苔むした木の幹の側の、小川のとりに残してきたのだ！……」と。彼の友人たちは疑いもなく、彼に主張しただろう——「君がその人物だよ」と。——しかし、誤まっているのは彼らであって、彼ではなかっただろう。

この一文と、書齋に帰ったときの「あの自己は失われてしまったのだ！ 別の人物が森から帰ってきたのだ！ 以前の単純さでは決して達しえないところの隠された秘密についての知識を身につけたより聡明な人物が帰ってきたのだ！」とを比較すれば、少くともこの回想の箇所までは、第二の変貌の段階がつづいていることがわかるはずである。したがって、第三の変貌が行なわれたのは、チリングワースが書齋に入ってきて、ディムズデイルの回想が断ち切られた以後ということになるが、片手を自分の胸におくのは、隠された罪の呵責に悩むディムズデイルの習癖であって、それを「抑制されない情動」の象徴とするのは見当違いといわねばならない。

が、問題なのは、第一の変貌を遂げた段階で生み出されたこの習癖が、第二の変貌を遂げて以来姿を消しているにもかかわらず、チリングワースがあらわれたとき再び見られたということである。そのときディムズデイル

は、「蒼白となって言葉もなく、」胸と聖書に左右の手をおいて復讐に狂奔するその敵と相対するのであるが、それはその瞬間、第二の変貌を遂げて以来彼が忘却していたところの、秘密の罪の意識と神に対する畏怖の念がよみがえったことを意味するだけではなしに、森やその帰路において逃亡の夢に酔い、悪の衝動に駆り立てられた自己の不遜に対する戦慄を彼が感じたことを示していると考えることができらう。彼はその瞬間、自分が非道の罪を隠蔽した偽善者であり、チリングワースの執拗な穿鑿の対象であり、死期の迫った墮落者であるという峻厳な現実を痛切に自覚して、残された僅かな生涯を帰依と懺悔滅罪に費やすことを決意したに違いない。「あと一年したら自分たちの牧師がいなくなつてはいまいかと皆が懸念している」というチリングワースの言葉に、「そうですとも、あの世に行つていましょう。天が良い方の世界を許して下さるとよいのですが。実際わたしは、あと一年間過ぎ行く四季を信者たちと一緒に送れるとは殆ど思つていません」と彼が答えたことはそのことを暗示しており、その後直に彼が「神の啓示に導かれ」たかのように再び祝賀説教の筆をとり、祝賀日には森でのヴィジョンを完全に消却した言動を示し、「死にかけている身だ」から「急いでわたしに自分の恥辱を受けさせてくれ」とヘスターにいつて罪の告白をすることが、そのことを物語っていると見えるらう。すなわち、デイズデイルは、ちょうどグッドマン・ブラウンが森の魔女の祭典で邪悪な欲望に身を委ねようとした一瞬、その欲望を抑圧してしまつたように、チリングワースによって現実を認知させられた瞬間、逃亡の夢や悪の衝動を抑圧して第三の変貌を遂げ、峻厳なピューリタニズムの権化となつたと考えることができらう。だが、この解釈を論証するにはホーンソンの描写はあまりにも希薄であつて、所詮この問題に関しては推測の域にとどまるほかはないのである。

しかしながら、極めて明白なことは、ホーソンはディムズデイルの逃亡を、情熱・自由・改革への逸脱を非難しているということである。ディムズデイルが祝賀説教をもって有終の美を飾りニュー・イングランドを去ろうと考えたとき、ホーソンは次のように書いているのだ。

実際、なんと悲しいことだ、この可哀そうな牧師のそのように深く鋭い反省力が、かくも愚かに惑わされるとは！ 彼については、これまでもっと悪いことを語らねばならなかったし、これからもそうだろう。だが、これほどみじめな衰退を語らねばならないことは二度とないだろう。

また、逃亡を決意したディムズデイルがパールに接吻したとき、パールをしてその接吻の跡を小川で洗い流させたのも、その非難の表明にほかならないといえる。さらにまた、ホーソンは、ヘスターが情熱・自由・改革へ走るのを阻止するための歯止め役を、パールに果たさせているのである。

もしも、小さなパールが聖霊の世界から彼女（ヘスター）のもとに来ていなかったとしたら、事態は遙かにかわっていたとだろう。そのときは、彼女は一つの宗派の女性の開祖として、アン・ハッチンソンと相たずさえて歴史に伝えられたかも知れなかったろう。彼女はその一面において、女予言者になっていたかも知れない。彼女がピューリタン体制の根底を覆えそうとしたかどで、当時の厳格な法廷から死刑に処せられるということもありえないことではなかっただろう。だが、彼女の思想的熱狂は、自分の子供の教育にその捌け口を見出したのだ。神の摂理は、この小さな少女のなかで、女性としての芽と花が多くの困難を通して発育し、開花するよう、その任務をヘスターに与え給うたのだ。

この文の最初の「聖霊の世界から」(from the spiritual world)云々とは、神から与えられたという意味であって、ホーソンは「人間がこのように罰した罪の直接の結果として、神は美しい子供を彼女(ヘスター)に与え給うた」といい、社会の疎外者・追放者としてのヘスターが、当時の一七世紀の自由主義者アン・ハッチンソン同様の神権社会の改革者、ないしは女権拡張主義者となる可能性をもっているながら、パールの育成に献身したために、情熱・自由・改革への逸脱を免かれたことを神の恩恵として描いているのである。ディムズデルとの逃亡計画に忘れられた情熱の再現を感じたヘスターが、緋文字を投げ捨て、帽子の下に隠されていた豊かな黒髪をあらわにディムズデルのまえに垂らしたとき、彼女がパールの反抗にあって再び緋文字と帽子をとりあげずにはおれなかったことも、ホーソンがパールに課した役割を示す一例といえるだろう。

かくホーソンは、ヘスターとディムズデルの情熱・自由・改革への逸脱を阻止非難しているのであるが、それは一九世紀前半のロマンチズムと超絶思想と社会改革運動に疑惑と反発を感じていたホーソン自身の思想的態度の投影とってさしつかえないし、ディムズデルに第二の変貌を遂げさせることにより、彼を悪の容認・人間の可能性の追求の出発点に、情熱と自由と改革へ通ずる敷居に一度は立たせながら、適切な動機づけを行なうことなく唐突に反転させて第三の変貌に飛躍させているのは、ロマンチズム・超絶思想・社会改革運動という当時の時代思潮にホーソンが明確な批判論説を展開できなかったことの一つのあらわれといえるかもしれない。そして、そのことがとりもおさず、この『緋文字』という作品を「幸運な墮落」(fortunate fall)の枠内にとどめ、それを「神聖な母性愛」(Divine Maternity)を達成したヘスターと、「炎の舌」を獲得しビューリタニズムの化身となったディムズデルの物語に終らせてしまった最大の要因といえるだろう。

- (1) John E. Becker, *Hawthorne's Historical Allegory* p. 139 (Kennikat Press)
 - (2) *Ibid.*
 - (3) *Ibid.*
 - (4) *Ibid.* p. 145
 - (5) Roy R. Male, *Hawthorne's Tragic Vision* p. 114 (W. W. Norton & Company)
 - (6) John Caldwell Stubbs, *The Pursuit of Form* p. 95 (Univ. of Illinois Press)
 - (7) *Ibid.*
 - (8) またホーソンは、パールと言動を通して、デイズデイルの罪の隠蔽をも非難している。胸に手をあてるデイズデイルのオブセッションともいうべき動作を執拗なまでにパールに指摘させ、深夜の晒し台で「懺悔のまねごと」をするデイズデイルに対しては「明日の真昼に母やわたしと一緒にここに立って下をならせ。」とパールにいわせ、最後の晒し台の場面でデイズデイルが、ハスター親子とともに立ち、その胸にできた「恥辱の烙印」の「奇蹟」を人々に示したときに、初めてパールをしてその涙を「彼女の父親の頬に」落させ、父親であるデイズデイルの接吻を受けさせているのがそれである。
- しかし、だからといってマリー・マックナマラ女史の次の言葉には同意しがたい。
- 「小川のほとりにおけるパールの激情は、彼女の母親に向けられたとはいえ、それはデイズデイルのこころを深く傷つける。この過敏性の人物は、彼らの情事を再現せんとするハスターの計画と、彼の愛情に対するパールの頑固な拒否のために、歓喜と失望の両極を殆ど同時に経験するのだ。彼の未認知の娘は、ハスターの逃亡の意志を彼が承したことは彼の問題に対する虚偽の解答であり、彼女にとって不快なものであることを無言の言葉で彼に告げるのだ。彼女は彼の罪の隠蔽の継続を意味する計画に加わりつつはしないのである。」(Anne Marie McNamara, "The Character of Flame: The Function of Pearl," *American Literature* Vol. 27, 1955—1956 p. 542)

マックナマラ女史が、デイズデイルをあまりにも神経過敏な人物に作りかえていることは、森からの帰路のデイズデイルの念頭にパールのことは全然浮かんでこないことでも明らかであろう。また女史は、パールの言動を通してのホームズのデイズデイルに対する非難を、パール自身のデイズデイルに対する非難と誤認しているために、両親の逃亡の計画はおろか、デイズデイルが自分の父親であることさえ知らないはずの七歳のパールに、異常な直観力を想定しているのである。さらにまた女史は、「彼女に対する父親の罪は、父親であることを故意に罪深く隠蔽していることである」(Ibid. p. 541)と云い、「パールは、彼(デイズデイル)に父親であることを思いがけなく大衆のまえで告白させる動因でありうる」(Ibid. p. 537)とまで述べているが、デイズデイルの罪の意識は、ヘスターとパールに向けられている度合よりも、遙かに強く彼の信ずるビューリタニズムの神に向けられていることは、彼のヘスターに対する最後の言葉で明瞭である。